

まえがき

日本中世は、仏教色豊かな社会であった。仏の教えと救済、衆生の祈りと作善に満ちた社会であった。仏教は、政治・経済・法・外交、人生観(生と死)、医療、表象と建築など、人間社会の全てに関わる、壮大な知の体系であった。

仏教は、民族や国家を超える普遍的な真理を有したため、教えと行、仏教的行事、僧侶組織、寺院経済などは、都でも地方でも同じように見られることとなった。そのようなこともあり、大寺院が集中し、寺僧が一大社会勢力を有していた王都の京都が、仏教文化の中心と見なされた。王法仏法相依の思想のもと、京都・畿内の顕密寺院は、中世国家を支えることで、その宗教的正統性を確保していた。地方寺社を京都の顕密寺院に収斂していく脈管と位置づける黒田俊雄氏の顕密体制論「黒田一九七五」は、日本中世国家の体制的仏教を総体的に考察する上での有力な方法論として、今までも揺るぎない権威を保っている。

しかし、ここ二〇年間にわたる中世奥羽、わけでも平泉に関する研究は、このような京都中心の、はたまた中世国家という所与の統治権力体系からの視座でもつては、日本列島の各「地域」で生起し続けた多様な歴史発展の可能性を見過ごすことにならないのだろうか、という問題を提起してきた「入間田二〇一三d、斉藤二〇一四、遠藤「基」二〇〇五、小川二〇一五、菅田二〇〇八、八重樫二〇一五」。

そのような主張を生み出した背景には、平泉研究の格段の進歩があげられる。柳之御所遺跡・無量光院跡・白鳥館遺跡・衣川遺跡群などの継続的な発掘調査から得られる膨大な研究成果は、一大仏教都市平泉の政治・文化・暮らしの実像を浮かび上がらせるものであった。そこで得られた知見から、積極的に京都の王朝世界と人脈的にも切り結び人的ネットワークを獲得しながら展開していく、自立性あふれる平泉藤原氏像も明らかになった。従来の京都中心の歴史認識では、一大仏教都市平泉の世界をとうてい説明できないものであった。

さらには、一〇トン以上ものかわらけ、博多に次いで大量の陶磁器が出土する平泉は、中世鎌倉に先行する大都市として位置づけられた。平泉は、まさしく国際的通商都市であった〔入間田二〇〇二〕。平泉藤原氏は、蝦夷地(今の北海道)とれる大鷲の羽やアザラシの皮などの名産品を入手し京都に送り続けていたのであり〔斉藤二〇一三〕、本州の東北の端にある一地方都市というものではとうていなく、北東アジアという視座から見れば、平泉はむしろ国際通商世界の中核都市ともいべき存在であった。

院政期国家の範囲をはるかにこえて、東アジアとの直接的交通関係のもとにあった平泉文化が浮かび上がってきたのである。中尊寺の金銀字交書一切経は中国の五台山のそれを、造寺造仏においても東アジアのグローバルスタンダードを、それぞれ模範としたものであった。それは、顕密体制論の枠組みを平泉の、アジアの側から逆に照射しながらしていくことにもつながった。平泉の仏教文化を、広く東アジア世界の仏教世界のなかで鍛えていく、現実的な視座と方法論が求められるようになった。

最先端の仏教文化が平泉に導入されている、と言うことのみならず、平泉仏教そのものがアジアとの接点を主体的に模索していったこと、通商立国としての平泉政権を位置づけること、それが平泉研究の重要な視座となっている。このように平泉研究をアジアに「開くこと」によって逆に、アジアという地域のなかにおける、日本列島の歴史展開、あるいは「奥羽」という「地域」の歴史展開を照射するという段階に、いま平泉仏教文化の研究は立っていると

言える。東アジアへの視座なしには、中世奥羽の問題は解けない、ということが常識となっている。

そして、歴史学・考古学・都市学・土壌地質学・植生学・庭園学・建築史・書道・日本文学からの考察、陶磁器やガラス玉の電子工学的分析、さらには、中国・インドなどアジア諸国の研究者との共同研究、等々、まさしく学際的・国際的研究の最先端を平泉研究は、走っている。平泉研究に代表される中世奥羽の研究は、新たな段階に到達している。

もつとも、そうであればこそ、そのような歴史を持つ「東北史」とは何だったのか、という問いが再浮上することとなった。そもそも、この問いは、今を遡る六〇年も前に提起された高橋富雄氏の平泉論であった。同氏の奥羽独立王国論「高橋一九五八」は、今でもその魅力を失っていない。この高橋説の検討から、平泉政権Ⅱ院政期国家による北方支配機構とする説「遠藤巖一九七六」、また藤原秀衡の「平泉幕府論」[入間田二〇〇四b]、あるいは平泉藤原政権は「未完の北方王国」なりとする説「斉藤二〇一四」が唱えられた。特に後者の研究は、平泉が京都中心の歴史発展では説明しがたい、もう一つの歴史発展の道を歩んできたことを提起するものであった。ますますもって、平泉を研究することは、「東北史とは何か」「そのような東北史を有する日本史(日本列島史)とは何か」を考えることにつながっていった。

一方、中世後期の奥羽仏教に対する研究も、新たな段階に入りつつある。中世後期の奥羽社会では、むしろ蝦夷地との交易をも包み込んだ日本海交易によって開かれていたのであり、貨幣経済は奥羽の在地世界にも及んでいた、ということが明らかにされてきている。平泉藤原氏の時代以上の、さかんな商業活動が、点在する都市的な場を拠点に発展していたのであり、仏教は、そのような場にいち早く開花していったのである。熊野信仰に見られるように、遠隔地をつなぐ人的ネットワークの形成のなかで、人びとの信仰が生まれていた。さらには、室町幕府体制を作りだしている奥羽の武士たちの政治支配組織と交通命令伝達が、仏教政策をも内包しながら機能していくことも明らかにな

つてきている。

以上のことを考慮に入れながら、本書では、個々具体的な歴史的瞬間における人的ネットワークの実像を明らかにすることにより、中世奥羽の仏教を柔軟に描こうとしている。もって、政治制度史(国家史)的な歴史分析からの脱却をめざしたいと思う。文化を支える社会集団の具体的行動を追いながら、その実像を浮かび上がらせることは、国家と仏教という固定化された概念規定では解明できない新たな中世社会像(地域像)をリアルに描くことに繋がると考えるものである。前述のように、発掘調査などにより個々の事物が発見され、人間の姿が垣間見られるようになるまで研究が進んでいる状況もあつて、ますますこのような方法論が必要となつている。

そのためにも、中世奥羽という「場」で、改めて文献史学の立場から、史料を読み込んでみる必要がある。列島のなかの、アジアのなかの、奥羽(平泉)という地域、つまり「場」にあつて、そもそもどのような社会集団が、どう行動していったのか。その「場」に立ち帰つて、歴史を照射しなすこと「戸田一九九四b」。それこそが奥羽仏教を編み直すことに繋がる。そのように考えている。

仏教が「中世奥羽」の人間・社会集団と「切り結ぶ」決定的瞬間とは、どのようなものだったのだろうか。「歴史の場」に登場する為政者、僧侶集団、諸集団が、具体的に「いつ」「どこで」「何を」「どのようにしたのか」を徹底して見つめ、そこに潜む政治性(支配と隷属、交渉にみる政治主体の思惑)を再発見してみることにする。

中世奥羽の仏教を、内面的な信仰の発露という面にとどまらず、その思想を受容し、それに基づき「現実」に行動していく人間・社会集団の「政治性」において把握しよう、と私は考えている。このように「歴史の場」を検証し、そこから立ち上がつていく人間、社会集団の動きを浮かび上がらせることこそが、「地域」から日本列島史を編み直すことになるのであり、京都・畿内の歴史を奥羽から照射することになる、と考えるものである。

中世奥羽の仏教について、来世と現世との「接点」を、通時的な空間構成(仏神、聖なるものと俗なるものとの配置)